

見えるが、認識できない



年を取ると、どうにもならないことが多くなる。あっさり諦めよう。でも、どうなるか分からないことも多くある。

ふらつきが持病のS男さん。年のせいと言われてきた。80歳。ある日、左眼がパンダになって受診した。おでこを柱にぶつけたのだ。4、5日前から、左側にある椅子にぶつかったり、左側の柱やドアにぶつかったりするようになった。頭をMRI（磁気共鳴画像装置）で調べてみて、アッと驚いた。なんと、右側の頭頂葉（頭のとっぺん近く）に脳梗塞ができていたのではないか。もちろん、外傷によるものではない。

半側空間無視

その脳梗塞の症状は、視覚の失認である「半側空間無視」というものだ。先週書いた同名半盲とは違う。左側の視野半分には異常がない。左の視界にあるものは、なんでも見える。だが、見えていない。いや、見えるが、認識できないのである。左半分の空間に何かがあることに気付かなくなっているのである。

さて、S男さんのような「見えるが分からない」状態のひとつでは、「本当は見えていない」ということの自覚がない。そこが問題だ。その自覚のないひとが車を運転したらどうなるか？ 左半分の空間が認識できないのだから、簡単に交通

自覚ないことが、危ない

事故を起こすだろう。その点では、柱にぶつかっただけで済んだS男さんは、ラッキーなひとなのだ。高齢者による交通事故が増え、どれも認知症のせいだと思われる。だが、認知症のように、記憶力、注意力、判断力といった広範な脳の機能障害がなくても事故は起きる。脳の局所的な脳梗塞や脳出血による視覚異常が原因ということもあるのだ。

ところでS男さん。「ちょっとへんかな」と思った。けど、年だから」とは、諦めが早すぎる。いつもと違ったら、まずは医者にご相談を。

（石黒修三 いしぐろクリニック）
・脳神経外科専門医、金沢市在住